

---

# とある暗部の天使跳躍《エンジェルジャンパー》

原石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジェルジャンパー  
とある暗部の天使跳躍

### 【Nコード】

N8517Y

### 【作者名】

原石

### 【あらすじ】

【暗部】それは学園都市を闇から守るための組織。レベル4である天空颯希はグループなる暗部に所属している。彼は大切なものを守るために闇を突き進んでいく。とは言いつつも結局はコメディが多かったりする。異端者と魔術と科学が交錯するとき、物語は始まる。

少年紹介ヘイントロダクション (前書き)

二つ目のとあるの二次小説です。

気に入ってもらえたら幸いです。

## 少年紹介ヘイントロダクション

### PROFILE

名前：天空 颯希くアマゾラ サツキ>

年齢：16歳

容姿：緋弾のアリアの遠山キンジのような髪型で色は黒。若干ツリ目。

服装：上条当麻と同じ高校の制服でズボンの上のスネの辺りに学園都市製のプロテクターを着けている。プロテクターの色は黒で金属製。

特徴：基本はツツコミ。他人を放っておけない優しい性格。

身長：169cm

体重：56kg

能力：天使跳躍  
エンジェルジャンパー

学園都市の暗部の一つであるグループに所属しているこの物語の主人公。

レベルは大能力者（レベル4）。

グループ唯一のストッパーでもある。



## 少年紹介「イントロダクション」(後書き)

颯希「次回予告!!」

この俺、天空颯希に襲い掛かる数々の脅威!<sup>コメディ</sup>!

一癖二癖ある仲間たちはそれぞれの信念に従って独断行動をとっていく。

### 次回【<sup>グループ</sup>暗部組織】

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まる!!」

第1話 暗部組織へグループ（前書き）

颯希「今日は連続投稿だ!!」

淡希「是非最後まで読んで頂戴ね」

一方「読まなかったら殺す」

海原「それはやりすぎでは？」

元春「とにかくにも第1話」

「「「「スタアアアアトツ!!!」」」」

## 第1話 暗部組織へグループ

「シュッット」

ゴガアア！！

黒い学生服を着た黒髪の少年が鼻歌交じりに研究所内の機械を蹴り壊していく。

傍には少年によって意識を刈り取られた研究員たちが俯せに倒れている。

「な……なんで、ココを破壊……するん……だ……？」

まだ意識があつた一人の研究員が機材を蹂躪している少年に声をかける。

彼は恐れた。

彼は逃げたかった。

彼は学園都市の研究員。

頼まれたから研究していた。

そんな考えが頭を駆け巡る。

研究者の問いが聞こえたのか、あらかた機材を破壊した少年は妖しい笑みを浮かべて研究者の傍に歩み寄る。

「なんでって？ 俺も知らねえよ。ただ……依頼があつたから壊してるのさ」

「い……らい……？」

「そ。依頼依頼。だって俺たちはそうやってしか生きれないクズの集まりだし。結構給料もいいから続けてるわけだけどねー」



あははー！と子供のように笑う少年。

そんな彼を見て研究者は恐怖した。

コイツはヤバイ。

彼の頭がそう警報を鳴らす。

「で。後はお前を殺したら以来完了ってわけさ」

「こ…殺す!？」

死

そんな単語が頭の中を支配した。

死んだらどうなるかなんて誰にもわからない。

だからこそ研究者は死を恐怖する。

「た、頼む助けてくれえ!! わ、私はまだ死にたくない!!」

「命乞い? いいねソレ。俺なんかよりも百倍人間らしいよアンタ」

ヒュ〜と口笛を吹く少年。

研究者には彼の考えが読めなかった。

これは見逃してもらえたのか?と自己判断してしまうほどに混乱していた。

「ひ、ヒイ!!」

地面に這いつくばるようにその場から逃げ出す研究者。

そんな研究者の姿を見て、少年は先ほどよりも妖しい笑みを浮かべて

地面を蹴った。

ヒュンッ!!

「ぐぐあああああああああ！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

突然壁に吹き飛ばされてしまった研究者は状況がつかめない。

それもそのはず。

何故なら彼は……………遠くにいたハズの少年の飛び蹴りで吹き飛ばすのだから。

それも生半可の威力ではない。

飛ばされた研究者の体中の骨は全てが生物としてはおかしい方向に曲がっていた。

「ダメだろ。逃げだしたら。あ？」

先ほどまでのお気楽モードが一転。

少年の表情が不機嫌な色に染まっている。

「おうえ……………うぐあ……………」

死ぬほどの痛みが脳を刺激しているのにまだ死ねない研究者。

死ぬほどの痛み。

それがどれくらい辛いのか少年には分からない。

「死にたいか？ そうだよなあ！！痛みで悶えるくらなら死にたいよなあ！！！！」

ひゅんっ

その場に空気を切り裂くような音が響いた。

それは少年が凄まじい速度で足を振り上げた音。

「冥土の土産に教えてやるよ」

踵を研究者の頭に向けて力を込めて、蹴り降ろした。

「俺は暗部。能力名は

ドグシヤア！！

「  
エンジェルジャンパー  
天使跳躍だ」

「はあ……もうこんな時間かあ……」

人口約32万の都市である学園都市。

それがこの俺、天空颯希の住む街だ。

この街はとある一つの巨大な要因によって支配されている。

## 【科学】

それは人間の進化と共に発展してきたモノ。

科学とは歴史。歴史とは科学。

こんな風にイコールで結ばれるほど巨大な存在。それが科学だ。

この街はそんなモノで構成されている。

交通手段・通信手段・教育手段。

全てが科学一色で統一されている。

そんな異常なこの街では奇妙な研究開発がメインとなっている。  
その名も『能力開発』

この街に住んでいる学生みんなが受ける教育だ。

発現する能力は人それぞれ。

火が出る奴もいれば何も起こらないやつもいる。

そんな個人差をこの街では階級別に分けている。

下から順に、無能力者・低能力者・異能力者・大能力者。

そして、この街に7人しか存在しないという超能力者。

俺はその中の大能力者という階級に位置している。

「ふっふん 今日夕飯は何にしようかな？」

これでこの街の説明は終わりだ。

だって腹減ったし。俺、説明って苦手なんだよ。伝えづらいし言い  
難いし。

学園都市の学生の多くが住んでいる第7学区に俺の家はある。

今は完全帰宅時間が過ぎていている時刻なので学生は少ないが、おそらく  
1000人以上は住んでいるはずだ。

そんな第7学区をトテトテと歩いて家を目指す俺。

「しかし今日の仕事は疲れたな……よし。早く帰りたいから能力  
使おう」

ぱしゅっ

俺はその場から跳躍した。

それも近くのビルを軽く超えるぐらいの高さまで。

俺が所持している能力は【天使跳躍】。

体中の筋肉を自由に操作できる能力だ。他人の筋肉も操作できる。

まあ、触れていればだけど。

普段からこの能力で空中をかけているからこの名前が付いた。自分でも結構気に入っている。

肉体操作の能力を持つ学生はこの学園都市に3人ほどしかいないらしいな。

希少価値もあるらしい。

まあ、俺には何の関係もないけど。

「あー、風が気持ちいい」

ビルの屋上と屋上を渡ること数分。

俺は自室がある学生寮に到着した。

ここで1つ、豆知識を教えよう。

この学生寮に住んでいる俺の知り合いに神の奇跡としか言えないほどの不幸少年がいる。

車に轢かれたりバスに置いてけぼりを喰らったりとなんとも波乱万丈な人生を送っているバカ。

ソイツの部屋の二つ隣の部屋が俺の家だ。

さーて、早くゆっくりさせてもらいましょーかね。

がちゃ

ポケットから鍵を取り出して部屋の鍵を開ける。

そしてドアノブに手をかけて自分の方へ引いて開ける。

「おかえりー」



かなり大きい胸にサラシを巻いてその上にブレザーを羽織っただけという何ともエロティックな格好をしている俺と同じ大能力者【座標移動<sup>↑</sup>】の結標淡希が自分の手札を見つめながら言う。コイツは俺の1コ上だが一応幼馴染ということになっている。腐れ縁という奴だ。

「そんなことは見たらわかるんだよ！俺はなんで俺の家にお前らがいるのかって聞いてんだ！！」  
「いえ、ここが集まるにはちょうどいいんですよ」

名門常盤台中学の理事長の息子である海原光貴が淡希からカードを抜き取りながら答える。

コイツの海原光貴という名前は借り物だ。その姿も。

コイツの本名は知らない。実力も知らない。すべてが謎に包まれた俺の仕事仲間の一人。  
それが海原光貴だ。

「まったくグチグチうつせエなア。少しは見逃せよ颯希イ」  
「そう言いながら人ん家の冷蔵庫漁るの止めてもらえます？」

俺の許可なく冷蔵庫の中を漁っているこのアルビノ白髪赤眼野郎の名は一方通行。

この学園都市最強の超能力者。能力名は【一方通行】。この能力はこの世に存在するベクトルすべてを掌握するチカラ。故に最強。でも、とある事件がきっかけで彼の能力は制限されることに。今の彼の能力の使用時間は30分がいいトコ。燃料が切れたらただの人間になってしまう時限式爆弾野郎だ。

「そう言うなって天<sup>あま</sup>やん。ストレスは体に毒だぜい」  
「 temeエらのせいだけどなあ？」

どこの漫画の不良だよと言いたくなるような金髪と青いサングラスを装着してアロハシャツ、その上に学生服を羽織っているこの少年の名前は土御門元春。俺たちのリーダー的な存在なのだが極度のシスコン。

妹のためなら命なんてくれてやるぜ というぐらいの変態野郎だ。因みに能力は無能力者。一応【肉体再生】という能力を持っているらしいがハッキリ言って使い物にならない。

結標淡希・海原光貴・一方通行・土御門元春。

そしてこの俺、天空颯希。

この5人はとある組織のメンバーだ。

その名も【グループ】

最近できたばかりの新参組織で仕事はまだ少ない。でもメンバー的には最強だと思ってる。

全員が全員変わり者の集まりですけどね！……

「仕事お疲れ様。麦茶でも飲む？」

「ああ。俺の فقط」

「ぎゅぎゅぎゅぎゅ」

あー！生き返るー！

やっぱり仕事終わりの麦茶は最高だねー！！

「そういえば明日の仕事、一方通行と天やんが指名されてたぜい」



「ブ  
ッ！！！！」

宙で煌めく麦茶の雨。

「ってそんなことはどうでもいい！！」

「ゲホッ！ゲホゲホッ！！」

「大丈夫？」

「あ、ああ。ありがと。ってえ！！なんで俺と一方通行のコンビなんだよ！！！！」

「オイコラテムエどういう意味だ」

「知らないにゃー」

「俺の怒りの全てをこのキックに込める」

唸れ右足。大丈夫。俺なら出来る……

「こら、落ち着きなさい颯希」

ぼにゅ

淡希が土御門に攻撃を仕掛けようとしていた俺を抱き寄せた。

胸にサラシだけという格好をしている淡希がそんな行動をすうとどくなるか。

そう。俺の背中に淡希の巨大なアレが密着するのだ。

「あ、淡希……恥ずいから止めろって！！」

「ダメ。今私が手を離れたら貴方また暴れるでしょ？」

「い、イヤ……それ以前に数多くの問題が浮上してるんですよ……」

「何？ 嫌なの？」

「べ、別に嫌じゃ……」

あつさり論破されましたけど何か？

俺は淡希には弱いんだよ。悪いか！！文句あるやつは喧嘩買ってやるからかかってこい！！

「オアツイですねお二人さん」

「ってかラブラブしてるのを見せたいだけなんじゃねエの？」

「いよっ！目指せヴァージンロードだにゃー！」

こいつらはマジで一回シメた方が良くかもしれない。

俺のためにも淡希のためにも。

「五月蠅いつ！！！」

ひゅんっ

淡希の能力である【座標移動】によって一方通行たち3人の姿が一瞬にして消えた。

「……………あ、淡希さん？ 一方通行たちをどこに転移させたんですか？」

「んー？ 内緒？」

「あ、あははー……………」

俺は淡希の魔女のような凶器に満ちた眼を真っ直ぐ見つめることができなかった。

## 第1話 暗部組織へグループ（後書き）

海原「え？ 今回は僕が次回予告ですか？ 分かりました。

一緒に仕事をする事になった一方通行と颯希。  
かれら2人が依頼された仕事とは……

次回！！【テイクケア育児体験】

科学と魔術が交錯するとき、物語が始まります！！」

## 第2話 育児体験へイクケア（前書き）

颯希「今回は一方通行の意外な一面が見れるぜ!!」

御坂「そしてついに私が登場!!」

颯希「え？お前誰？」

御坂「とぼけんなあ

!!」

## 第2話 育児体験へ Teixeア

「あくせられーたー、だっこしてー」

「さつきー、もっと高くうー」

今俺は最悪の状況に困惑している。

隣に立っている一方通行も口の端をヒクヒクと引き攣らせてなんとか怒りを静まらせている。

今の俺たちの周りには

小さな子供が群がっていた。

「」（どうしてこうなった……）「」

「はぁ……憂鬱だ……」

朝日が学園都市を照らしているが俺の心は曇りだ。ってゆーか雨だ雨。それも大雨。

「オマエそれは俺への挑戦状オカ？」

俺の隣に立っている一方通行が額に浮かべた青筋をびくびくさせながら俺を睨む。

元々悪人面のコイツがそんな表情をするとマジで怖いから止めてほしいと俺は思ってるんだけど絶対に止めてくれないよなー。



まさに一色触発。何かの合図でこの場が血の海になりかねないほどだ。  
しかし俺は負けられない。このモヤシ野郎にだけは絶対に負けられないんだ!!

しかし　　その決闘が始まることは無かった。

ゴイイーン!!

「っいつつアアアアアアアアアア!!!!!!!!」

俺の頭に襲い掛かる強烈な痛み of 衝撃。  
隣の一方通行も痛み to 悶えている。

こゝこの衝撃を生み出せる奴つてまさか……

「オマエ何しやがる!!」

「頭割れたらどうすんだアホ!!」

「それはこつちのセリフよ!! なんでアンタらはこんな朝っぱらから規模の小さい喧嘩してんの!？」

俺と一方通行の頭に鉄拳を落としたコイツの名前は御坂美琴。名門常盤台中学のエースと呼ばれている学園都市の第三位である超能力者だ。能力名は【超電磁砲】。簡単に説明すると電気を操る能力だ。

「黙れクソガキ!! オマエみてエな世間知らず野郎はそこら辺のコンビニで漫画でも立ち読みしてる!!」

「何ですってえ　　!?! コミュ障ウサギのくせに!!!」

「よし決めた。コイツ殺すわ」

どうやら今の御坂の言葉が一方通行の逆鱗に触れてしまったようだ。

まあ、確かに一方通行はコミュ障だ。すぐにキレるしすぐにイジケル。なんて付き合いにくい奴であろうか一方通行。流石の俺でも同情するよ。」

「ってゆーか何でこんなトコに御坂がいんの？」

「今日は休日だから学校が休みなのよ」

学校が休み……っことは今のコイツは暇なのか。  
うん。嫌な予感が体中を駆け巡ってるね。

「それはそうと犬猿の仲のアンタたちが2人揃ってどこに行くの？  
またグループの仕事？」

………先ほど暗部は目立つなとか何とか言っただけどこの街では意外と目立ってます。暗部間の中もそんなに悪くないし割と平和な日常送ってますねハイ。

嘘を吐いたのには理由がある。

だって暗部とか言う名前の癖に平和な日常送ってたらなんかかっこ悪くない？ 殺人依頼とか受けたりするけどほとんどの仕事は学生とか職員とかからばっかだったりする。暗部って万屋なのかな？

「いやそうなんだけど……」

「私も混ぜなさい。どうせ平和な仕事なんでしょ？」

「嫌ですウ。何でオマエみたいな雑魚を連れて行かなきゃいけないんだよ」

「良いじゃない別に。人手は多い方が良いでしょう？」

「……」

小さな胸を張って自分を連れてけとアピールをする御坂を茫然と見つめる俺たち二人。



コイツは何を言ってもついて来る。

そう判断した俺たちは『はあ……』と溜め息をついて御坂に言った。

「どオセ言っても聞かねェンだろ？　しょオがねェから今回だけは許可してやんよ」

「よっしゃっ！ーいやー一方通行分かってるじゃない。これでアンタのコミュ障レベルが1下がったわよ？」

「どオでもいい……」

「あ。バス来たぜ」

バスを待つこと1時間。ようやくバスが到着したので俺たち3人は乗り込んで第13学区を目指した。

「」「」……「」「」

バスに揺られること数十分。

第13学区にたどり着いた俺たちは土御門の送ってきた地図を頼りに仕事の場所に到着した。

したんだけど……

「ねえこいつ……」

「まじっことなき幼稚園だな」

よく考えれば分かることだ。

第13学区は幼稚園や小学校などの初等教育機関が集中している学区だ。

そこで仕事がある。その言葉だけで今回の仕事の内容ぐらい分かったはずだ。

「まさか幼稚園の園児の相手するってことか……？」

「どこに行くのかしら？ 一方通行」

幼稚園を目の前にして呆然としていた俺たちの目を盗んで逃げようとしていた一方通行を御坂が捕獲。

肩をガシィ！と掴まれた一方通行はビクウ！と大袈裟に飛び上がった。

「い、いや……ちょっとトイレにな……」

「それならココでしていけば？ トイレぐらいあるだろうし」

「俺は園児じゃねエ」

「今からは幼稚園の職員だけだね」

「そんな仕事受けた覚えはねエ」

「そんなこと言っても指定された場所がココなんだ。もう諦めようぜ一方通行」

既に諦めようと悟った俺は一方通行を優しく諭す。

これは俺たち2人に来た仕事だ。依頼人の信用を失うわけにはいかない。

それが 俺たち万屋の在り方なのだから。

つて万屋じゃねえよ！！

「うるせエ！！オマエ俺に育児なんて似合うと思ってんのか！？」

怖ろしく似合わないと思ってます

「はいはい。いいから行くわよー」

「離せエ!!!俺は行かねエ!!!」

「いい加減に覚悟決めろよ。どうせ一日だけなんだから」

文句を言って逃げようとする一方通行の両肩を俺たちは2人で掴んでずりずりと引きずりながら幼稚園の園内に入っていった。

「貴方たちが今日のボランティアの人たちですね。お待ちしてあげました」

園内に入ると初老の女性が挨拶をしてきた。

「どうやら俺たちはボランティアの人という設定になっているようだ。まあ、その方が仕事もしやすいけど。」

「ではこちらの服に着替えていただけますか？」

「「げっ」「」

園長が示した方を見つめる。

そこにあったのは幼稚園の職員ならだれでも着けているであろう職員用のエプロンが。

相手が小さな子供だからだろうか、エプロンの色は水色とオレンジとピンク。

俺と一方通行は恐怖した。

これを着るのか……？と。

「分かりました。オレンジもーらいつ！ほらアンタたちも早く着けて」

「「あ、ああ……」」

御坂がオレンジのエプロンを選んだ瞬間、俺と一方通行の時間が止まった気がした。

これで残るは水色とピンク。

男としてのプライドが水色を選べと轟き叫んでいる。

しかしそれは一方通行も同じの形で俺たちの視線は水色のエプロンに集中していた。

そして……………時は動き出す。

「「最初はグー！！ジャンケン

ポンッ！！」」

「それじゃあみんな。今日、貴方たちの面倒を見てくれるお兄ちゃんたちを紹介するわよ」

職員の一入の若い女性が小さな子供たちの意識をこちらに集中させた。

俺たち3人の姿を見てざわざわとなる子供たち。

これは俺たちと子供たちの戦争となるだろう。

しかしその時、俺と御坂は違うモノと戦っていた。

「それじゃあまずは一番右の人からの紹介よ？ それじゃあどうぞ」

「……………一方通行だ。よろしく」

「（もつと友好的にしてください！！）」

「ぐっ……………あ、一方通行ですウ。み、みんなよろしくね」

「っん  
！！！！！！」

そう。それはピンクのエプロンを装着した一方通行との戦いだ。

普段から無愛想な一方通行がピンクのエプロンをつけて友好的な挨拶。

そんな光景を目の前にして俺と御坂は顔を真っ赤に染めて笑いを必死にこらえている。

「（だ、駄目だ……………今笑ったら殺される……………ぷぷっ）」

腹が痛い。粘れ俺の横隔膜！！

「しつもん！」

すると園児の一人が可愛らしく手を上げた。

この時の俺は「可愛らしいなあ……………」程度にしか思っていなかったのだが、この園児の質問が俺と御坂の横隔膜を殺さんと攻めてくることに。

「あくせられーた先生！ウサギみたいだからウサギの物まねしてー

！」

「「「！？」」」

「わー！それあたしもみたいー！」

「ぼくもー！」

一方通行のウサギの物まね。

そんな光景を見たことがあるやつを俺は知らない。

「（一方通行君！園児の要求は断わらないでね！）」  
「ぐっ」

両手の拳を力いっぱい握りしめる一方通行。

そんな一方通行を見て覚悟を決める俺たち2人。

何の覚悟かって？ 笑いを堪える覚悟さ。

「う……………ウサギだぴよん」

両手を頭の上に突き立ててウサギの物まねをする一方通行。

そしてその時の俺と御坂はというと……………

「ぶ……………ぶふう！！（耐える俺俺なら出来るでも一方通行のウサギが傑作でぶふう！！い、いや耐えるんだ！！ここで笑ったら殺される！！大能力者の俺が第1位の一方通行に敵うわけないから耐えなければ！！）」

「っ！！（ふるふるふる）ぶっ…ぶぶくくっ！！（耐えるのよ私！！いくら園児の前だからって一方通行が私たちを殺さないとも限らない！！で、でもさっきの一方通行が頭から離れなくて……………ぶふう！ぴ……………ぴよん！って……………あ、あの一方通行がぴよんって……………っ！！）」

絶賛悶え中だった。

少し気を抜けば地獄への片道キップが白い悪魔からプレゼントされるであろうこの状況。

俺と御坂はそんな状況に必死に耐えている。

これは神が俺たち2人に与えた試練。

これを取り越えればまた1つ成長できるはずだ！！



## 第2話 育児体験へテイクケア（後書き）

一方通行「ああ？今回は俺が次回予告ウ？ チツ。メンドくせエがやっつてやんよ。

いつものように買い物に出かけた颯希。

しかしその買い物への道に立ちはだかる数々の試験アクシデント果たして颯希は無事に買い物を終えることができるのか

！？

次回！！【超能力者《レベル5》】

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まる！！！！」



### 第3話 超能力者へレベル5〈前書き〉

颯希「この作品の時間軸はオリジナルだ。原作に沿っているところもあるし沿っていないところもある」

垣根「ぶっちゃけてんなあ」

### 第3話 超能力者へレベル5

1

「うーん……………」

天空颯希は唸っていた。

悲劇の幼稚園事件から二日たった今日。

さて、朝ごはんでも作ろうかなーとキッチンにある冷蔵庫の扉を鼻歌交じりで開ける颯希。料理を趣味の一つとしている颯希。そんな彼は冷蔵庫の中を見た途端に絶望することになる。

「空っぽじゃん……………」

目の前に広がっているのは白い壁。冷蔵庫の中身があまりにもないので奥の奥まで見えてしまっているのだ。

「あいつ等のせいか……………最近外食で済ませてばっかだったから気づかなかったなー」

颯希は三日前に一方通行を筆頭としたグループのメンバーに冷蔵庫を漁られていた。肉好きの一方通行と土御門。野菜好きの結標。オールラウンダーの海原。こんな奴らが攻めてきてしまったのは食材たちも防御のしようが無い。

颯希は『はあ……………』と深く溜め息を吐いて、ぼそつと呟いた。

「買い物、行くか」

「ふう。やっと着いた」

学園都市中を走っているスクールバスから降りた颯希が嘆息する。颯希がやって来たのは第4学区。ココは食品関連の施設が多数存在し、世界的に有名な料理店なども多く展開されている学区だ。

そんな第4学区での颯希の今回の目的。

「今日は特売日だからな。一か月分ぐらい買い込んでおきたいなあ」

別に颯希は貧乏なわけじゃない。学園都市で上から二番目のレベルである大能力者の颯希にはそこそこのお金が支給されている。

それなのに颯希が特売日を狙ったのは何故か。それは彼の二個隣の部屋に住んでいる不幸学生の影響のせいだと言える。

常に不幸なその学生の名は上条当麻。学園都市一の不幸者と言っても足りないぐらいの不幸っぷりを発揮する青年だ。車には轆かれし財布も落とす。自動販売機に二千円札を飲み込まれてしまうし学園都市第三位の御坂美琴にも喧嘩を売られる。そんな不幸な出来事が日常の上条当麻。そんな彼には学園都市約32万人の誰も所持していない能力がある。

【イマジンプレイカー  
幻想殺し】

それは異能の力ならばどんなものも打ち消してしまう能力。それ

ゆえに神が授ける幸運も打ち消してしまう。その能力は身体検査システムスキャンでは無能力者と判定されてしまう。

だからこそ上条当麻は不幸なのだ。

ここは能力者の街である学園都市。

無能力者である上条当麻に支払われる金額は微々たるもの。そんな彼はそこらの主婦顔負けなぐらい特売が大好きだ。自分の人生そのものだと言ってもいいかもしれないと本人は語っている。

そんな上条に影響された颯希もまた、特売日を好きになった。

「さてと……まずは肉だな肉」

今日は豚の生姜焼きだひゃっほう！と心の中で歓喜しながら精肉店へ足を進める颯希。

しかし、巻き込まれ体質である颯希が何の事件にも巻き込まれずに目的の場所にたどり着くなど不可能だと颯希は自分自身で思い知ることとなる。

「お。颯希じゃん。久しぶりだな」

「帝督……」

出会いたくない人物に会ってしまった。そんな感情を顔に露骨に出している颯希の目の前に立っている少年の名は垣根帝督。この学園都市の第二位の序列に位置している【未元物質】ダークマターという能力者を持っている【スクール】という暗部組織に所属している超能力者だ。

【未元物質】とはこの世に存在しない新しい物質を操る能力。翼も生やせるし太陽光線を殺人ビームに変えることだってできる。そんな彼に付いたあだ名。それは、

「メルヘン野郎がどうしてこんなところに……」

以前、一方通行と颯希が垣根帝督と出会った際に、翼が生えてるってどこの天使だよバカヤロー。と罵倒してからというもの、垣根帝督にはそんなあだ名がついた。しかし本人にも自覚はあるらしく『似合ってるねえことぐらい自分で分かってんだよ』と切り返しを見せたのだが、『自覚があるのにメルヘンって……ファンタジーの世界に帰れ』という颯希の非情な言葉の剣に袈裟切りにされてやむなく惨敗。

それ以来、垣根と颯希は何の因果か街でよく出会うようになり、今では名前で呼び合う仲に。

まあ、垣根は颯希のことを親友と思ってるが颯希は垣根のことを面白い知り合いぐらいにしか思っていない。

そんな食い違いの関係を保っている二人がいつものように出会いを果たす。

「誰がメルヘンだ。まったく、こんなところで俺に出会えたって言う奇跡を喜んで欲しいぐらいだぜ」

「スマン。俺って日本語しか理解できないんだ。もう一度その言葉を和訳してくれるか？」

「日本語だ！！それもかなり日常会話に近いレベルのな！！」

学園都市で一方通行に次ぐ強さを誇っている垣根を口先だけであしらう大能力者。こんな光景を見た人は嘘だろ？と自分の目を疑うか神への祈りを捧げるのだろうか、颯希たちの知り合いから見たらまたあいつ等やってるよ。良く飽きねーな。と溜め息を吐きつつジト目を向ける光景なのだ。

しかし、今の颯希の目的は特売で半額になった肉の数々。彼はこ

んなところでメルヘンを相手にしている場合ではない。俺を肉たちが待っている。そんなことを考えながら颯希は垣根から逃げる方法を頭の中で模索する。

(コイツのしつこさは冬に差し掛かってもぎりぎり生き残っている蚊のレベルだ。生半可の言い訳じゃ逃がしてくれるわけもない。それなら)

考えは纏まった。後はこれを実行に移すだけ。

颯希はこちらに向かって文句の嵐を飛ばしている垣根の眼を真っ直ぐ見つめて言い放った。

「俺さあ、今から地球救いになきゃいけねえからまた明日な」

「じゃあ俺もついていくぜ」

その場を静寂が支配した。颯希の頬から一筋の汗が流れ落ちて地面に染みを作り出す。

失敗しちまったな。そう颯希は確信した。よりもよって地球を救うため。しかもそれを自分よりも強大なチカラを持った垣根に言ってしまった。

もっとよく考えればよかったんだ。あと少し思考を張り巡らせていれば分かっていたんだ。そう自分を責める颯希。

しかし時間が巻き戻ることは無い。すべてを諦めた颯希は深い溜め息をついて、

「買い物に行ってたんだ。一緒に来るか？」

「ああ。俺が奢ってやってもいいぜ？」

「いや、いい……」

パラパララァン

垣根帝督が仲間になった！

職業はメルヘン野郎。ステータスは全て完スト。性格に大きな欠陥があるよ

「なんだこのパーティ……」

天空颯希は絶望した。肉、売り切れてなけりゃいいなー、と。

3

結局、余ったのは豚バラ串だけだった。

颯希的には『何で精肉店に串焼きが売ってんじゃコラア！！』と店員に殴りかかりたい気持ちでいっぱいだったのだが、自分のせいで肉を逃したんだと反省した垣根が余っていた豚バラ串100本を買い占めてくれたのでその気持ちを抑え込むしかなかった。

天空颯希は悪人ではない。悪人ではないからこそ自分を抑圧するし他者を助ける。

「あとは何を買った？」

「ん？ そうだなあ。野菜だな野菜。トマトを十個ほど買ってキャベツを数個買ってそれからそれか」

颯希の言葉が途中で止まる。それを見た垣根は不思議に思って颯希の視線を追ってみる。

そこには常盤台のツンデレ第三位と学園都市最強のモヤシっ子超

能力者が口喧嘩をしていた。

「だーかーらー！そのストラップを私に寄越しなさいって言うてんの！」

「ハッ。何で俺がオマエなんかに自分の所有物をあげなきゃいけないんだ？」

「そんなこと関係ないわ！私はそのストラップが欲しい！それだけで私の行動は正当化されるのよ！」

「おい駄目だコイツ。まったく人の話を聞こおとしねエ。っていうかよオ、中学二年生にもなってこんな子供だましの為に製造しましたーって自己主張してるよオなカエルのストラップを欲しがるとオマエって何？」

「なっ……！？ アンタ今ゲコ太を侮辱したわね！？ 許さない！」

バチバチィ！と御坂を中心として青白い電流が辺りに広がった。

近くにいた学生は何が起こったのか理解するまもなく意識を手放す。

おいおいマジかよー、と顔を真っ青に染める颯希と垣根。たとえば暗部なんか言う闇に腰までどっぷりと浸かったような組織に所属していようと彼らは常識ぐらい弁える。彼らはどんなに言い訳をしようが罪に問われれば少年院に入るしかなくなるのだ。

だからだからだと嫌な冷や汗が颯希と垣根の背中に流れる。

ここであいつ等に見つかつたらダメだ。見つかつたが最期無事に帰れなくなる。そんなの嫌だーっ！

しかし現実には二人が思っている以上に非情だった。

「ん？ 颯希に垣根じゃない。どうしたのこんなところで」

それはこっちのセリフだバカと青筋をびくびくさせつつ颯希と垣



根は思う。彼女は腐っても超能力者。実力は折り紙つきだし実際強い。そんな彼女に何回も勝ったことがある颯希と序列が彼女より上の垣根ですら顔を真つ青に染めてしまふ。それが御坂美琴。

「今日はアレか？ 厄日なのか？」

「おそろくな。それに超電磁砲と一緒にクソセロリもいやがるなんてな」

「オイ。今なんか言いましたかア？」

カチツと首に付いている能力操作の電極のスイッチを入れる。おいおい洒落になってねえよー！と颯希と御坂は数メートルほど距離を空ける。

そこには第一位と第二位が睨み合っている光景があった。

まさに一色触発。この均衡が破られたが最期、この場は血の海と化すだろう。

うわうわやべーよ誰が止めてー！と颯希と御坂があわあわするがこの二人を止められる人物がこの場にいるわけもない。二人の願いは宙へと霧散して消え去った。

「チツ。まアいい。今日オは急ぎの用事があるから見逃してヤンよ」

予想もしない一方通行の一言。え？あれ？終わった？やったー！と体で嬉しさを表現しつつ歓喜する颯希と御坂の二人。話し合いで解決してくれるのは願ってもない展開だ。

「チツ。何だよ面白くねえ。興が削がれちまったなあ。悪い颯希。

俺も帰るわ。じゃなー」

なんてマイペース。そしてどこまでも唯我独尊。颯希は一つ溜め息を吐いて、

「もう帰ろう。別に今日中に食材を全部集めなくちゃいけないわけじゃないんだし……」

自宅がある第七学区行きのバスに乗って颯希は帰宅した。

4

「どうしたのですか？ わざわざ私に連絡を取るなんて。珍しいこともあるものですね」

天草式十字凄教の女教皇である神裂火織かんざきかおりがイギリスにあるイギリス清教の女子寮の自室で自分の獲物である七天七刀の刃を手入れしながら携帯電話で会話をしている。

『珍しいって……そんなことないと思うのよな』

「いいから要件を言って下さい。どうせ何かトラブルか何かでしょっ？」

『流石は女教皇、勘が鋭いのよな』

電話の向こうにいる青年  
声色で話を続ける。

建宮齋字は一呼吸おいて真剣な

『世界にまた新たな脅威が迫っているのよ』

「新たな脅威……?」

『今までの敵なんか目じゃないぐらいの敵なのよな。はあ、今回もアイツらの助けを借りないといけないのよ……』

「上条当麻と天空颯希の力をですか？ その脅威というものはそこまで危険なものなので?」

『危険も危険。女教皇一人でも勝てないぐらい危険な敵なのよ』

イギリス清教の中でもトップクラスの実力を持っている魔術師の神裂でも勝てるかどうか難しい敵。幾多の戦いを乗り越えてきた彼女が久しぶりに覚えた恐怖。

だからこそ彼女は建宮に尋ねる。自分の幸運を嫌う彼女は実力が全てだと思っているから。

「教えていただけますか？ その敵の名前を」

『もともとそれを伝えるために高い国際料金支払ってわざわざ電話したのよな』

通信用の術式でも使えばよかつたんじゃないかね?と疑問を浮かべる神裂だったがここでツッコんでしまったらせつかくのシリアスマードが台無しだと独りでに悟って建宮斎字の言葉を待つ。

『【ジャック・オ・ランタン】。10月31日に現れる驚異の象徴なのよ』

それは悪魔を騙して地獄に落ちて怪物へと変貌した男の名前。

10月31日のハロウインの日、大能力者と幻想殺しは世界規模

の戦いに向かうこととなる。

### 第3話 超能力者へレベル5（後書き）

結標「え？ 今日私は私が次回予告？ 分かったわ。

突然イギリスに來いと呼び出された颯希と幻想殺し。

これは再び騒乱の予感！とぶるぶる体を震わせて恐怖するが人の事情なんてお構いなしのイギリス清教の間の手が2人に襲い掛かる。

次回！！【10月29日】

かいせんまえ

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まるってちょっと！私  
の出番は！？」

第4話 10月29日へかいせんまえ（前書き）

颯希「そういえば原作では10月30日に第三次世界大戦が終了したみてえだぞ？」

淡希「それを今言っでどうする訳？」

颯希「いやー……原作、ブレイクしてんなーって思っでさ……」

淡希「それだけは言わないで。この小説を根本から否定している言葉だから」

第4話 10月29日へかいせんまえ

1

バアアアン！！

颯希の部屋の扉がぶっ飛んだ。

別に爆弾が仕掛けられていたわけじゃない。キレた一方通行が蹴り飛ばしたわけじゃない。ストレスを晴らすために颯希が殴り飛ばしたわけじゃない。

颯希の顔の真横を壊れた扉が通り過ぎていく。それに巻き込まれたテレビや洗濯物やゲーム機などが成仏していつてる様に見えるが、まあ、買いなおせばいいか。と大能力者の天空颯希は楽観した。朝ごはんであるカツパ麺をのどに詰まらせてせき込みながら、颯希は扉の破壊者の姿を確かめた。

「何朝からトチ狂った行動にでてんだよ当麻……」

扉を破壊した犯人の名前は上条当麻。颯希の二個隣の部屋に住んでいる不幸な少年だ。

【幻想殺し《イマジンプレイカー》】という神の奇跡とかそこら辺の最強系能力とか全部まとめてかかってこいや！というなんともチートな能力を所持している少年だ。

ツンツン頭の黒髪で顔のつくりは男前。それに【女性落とし】フリゲメイクという体質を持つ上条当麻は現在、はー！はー！と修羅の如き表情で颯希をじっと見つめている。

「な、何だよ……」

「颯希……お前、神裂から連絡来たか？」

「はあ？ 神裂から？」

連絡って何だよそれよりも壊した扉弁償しろよなーっとなんか内心思いながら颯希は傍に置いていた黒のなんともシンプルな形状をした携帯電話を開いて着信履歴を確認する。

【神裂火織：100件】

カランカランカランっとなんか颯希の手から箸がテーブルに落ちた。背中と顔にビツシリと嫌な汗が噴き出してくる。鳥肌も『もうこれやばいよね？』というぐらい発動している。

ヤバイヤバイヤバイ

颯希の頭の中にはその言葉しか浮かんでいない。よりもあの人を怒らせちゃったかチックショー！！と自分の鈍感さを恨むが今更時間は戻らない。

颯希はギギギっとなんか壊れかけの機械仕掛けの人形のように首を上条の方へ向けて、

「100件も来てた……」

「いやいやいや、どんだけ鈍いんだよお前」

「だってマナーモードにしてたしっ！ ってゆーか、それでも100件って多すぎねえ!？」

あの短気な神裂が100件も電話をする。そんなイレギュラーが颯希をどんどん追い詰めていく。

慌てふためいてこのままじゃ灰になって消えてしまいそうな颯希



を見て一回溜め息を吐いた上条当麻はずかすかと部屋に上がりこんで颯希の向かいに座り、颯希が食べている途中のカップ麺をズズズザザッ！！！と胃袋に流し込む。

「ごちそうさん」

「って人が放心状態になっている間に何やってんだテメェ！」

「いやー、かれこれ二日間ぐらい絶食してたから体が勝手になー」

「絶食ってお前……またあの暴食居候シスターが原因か？」

白い修道服を纏った銀髪食いしん坊の完全記憶能力がもはや飾りですねシスターを頭に思い浮かべながら訪ねる颯希。上条当麻のもとに居候しているシスターのことはよく知っている。月に一度の割合で自分の家にも上り込んでくるし冷蔵庫の中身を荒らしたりもする。もはや彼にとつて銀髪シスターは災害のようなものだった。

そんな颯希の問いに、よく見たらげっそりとしてる上条当麻が顔に影を落として地獄の底にいるような声で返す。

「所持金全部持ってかれたんだよ……次の支給日まで結構あるのに……」

「……いつでも食いに来ていいぞ」

「さんきゅ……」

第7学区の男子寮の一室の空気が酷いぐらいに重くなった。

「で。神裂からは何て連絡が来たんだ？」

結局このまま沈んでいてもしょうがねーと判断した颯希はどうせ気になってたしいいかーっと自己判断して上条当麻に尋ねた。神裂から電話が来るということはまた何かのトラブルが発生したんだろう。それならやっぱり確認は大事だと思うと颯希は思う。

天空颯希は学園都市側の人間だ。それなのに何故彼が魔術側の連中と知り合いで頼られるほど信用されているのか。それは彼の家庭環境にある。父はローマ正教の魔術師で母は学園都市の研究者。そんな世界も双壁を成す存在をまたぐ存在。それが天空颯希だ。

普通ならば学園都市の人間が魔術と関わってしまったら世界のバランスが崩れて大惨事となる可能性が浮上する。それなのに何故彼が平気で魔術側と関わることができるのか。それはこの学園都市の最高責任者の存在があるからだ。

アレイスターⅡクロウリー

大昔に名を馳せた魔術師と全く同じ名前を持つ人間の名だ。男にも見えて女にも見える。笑っているように見えて怒っているようにも見える。そんな異常な塊が集合したような彼のこの学園都市での立ち位置。それは学園都市統括理事長だ。彼は科学と魔術のバランスを保つのに重要な人物。そんな彼が大丈夫、コイツなら何の問題もないと判断したからこそ天空颯希は魔術サイドにかかわれる。

では何故、アレイスターⅡクロウリーは天空颯希が魔術サイドに関わることを黙認しているのか。その理由は天空颯希の能力にある。

エンジェルジャンパー  
【天使跳躍】

ハッキリ言おう。こんな能力を外に出したところで学園都市の技術が外にばれる恐れはないと。

第3者から見ればただ、凄い運動神経ですねー。と嘲笑される能力。

そんな能力がいくら魔術サイドに関わろうとも世界のバランスが崩れることは無い。

颯希の問いにカップ麺を泣きながら流し込んでいた上条当麻は傍にあつたタオルで口を拭いて答えた。

「イギリス清教と協力して倒してほしい敵がいるんだとさ」

「イギリス清教と協力って……そんなにヤバイ敵なのかよ」

イギリス清教の魔術師の強さは颯希でもよく知っている。天草式十字凄教の女教皇である神裂火織にルーン文字という古代の文字の魔術を使用するステイル<sup>プリエステス</sup>マグヌス。その他にもゴレム使いのシエリー<sup>ク</sup>クロムウエル、と優秀な魔術師が揃いに揃っているイギリス清教。そんな組織が協力を求めてくる。それはすなわち強大な敵との戦いが待っているということだ。

「そうみただけで俺は詳しくは知らない。ただ……十時までイギリスに来てって言われただけだ」

「……………」



とある服屋にて。

大能力者の【座標移動】である結標淡希は、むう……と唸っていた。

彼女の目の前には黒を基調としたワンピースと白を基調としたワンピースの二着が掛けられている。

(どっちの方が颯希は喜んでくれるのかしら……)

暗部に所属している結標でもまだまだ年頃の女の子。幼馴染の反応が気になる年頃のような。

その噂の幼馴染が今にも世界的な戦いに身を委ねることなど到底知る由もない結標はただただ服を見比べていた。

(やっぱり黒の方が良いかなあ。……いや、でも、白も意外と捨てがたい。……でも白かあ……。私にはあまり似合いそうもないわね……)

結標淡希はただただ悩む。

幼馴染の喜ぶ顔が見たいから。

「……おい、鳴ってるぞ当麻」  
「分かつてる……」

百人中百人が醜い争いだと断言するような喧嘩の途中に上条当麻の携帯電話の着信が鳴った。誰からの着信かなんて二人には予想ついている。颯希にいたっては「絶対に怒ってるだろうなあ」と清々しいほど晴れ渡っている青空を涙を流しながら見つめる始末。

そんな彼を苦笑いを浮かべながら見た上条当麻は携帯電話の通話ボタンを押して、

「この番号は只今使われておりません。ピーっという発信音の後に  
お電話の方は……」

『そうですか分かりました。それなら今すぐにでも貴方方の息の根  
を止めて差し上げましょう』

「ホントスイマセン。それだけは勘弁してください！！ 俺たちが  
悪かったです！！」

チート少年KAMIJOUが膝をガクガクと震わせながら謝罪するほどの相手

神裂火織。

天草式十字凄教の女教皇を務めている女性だ。得物は二メートルを超えるほどの長さを誇る【七天七刀】。【聖人】と呼ばれる体質を持った女性でイギリス清教でもトップクラスの実力を誇る魔術師だ。

先ほど100件もの電話を無視された彼女の声には明らかに苛立ちが含まれている。背中に嫌な汗を大量に掻く天空颯希と上条当麻でも、このまま放置はやべーよと悟り、

「えっと……何の用件でしょうか神裂さん」  
『その様子ですとまだ空港にすら向かっていませんね。まったく、貴方という人は……』

電話の向こうで『ぎゃーっ！それは私のチョココロネですー！』とか、『食事中に走り回らないでください。シスター・アンジェレネ！』とかいうドタバタな物音が鳴っている。あー、またあの大小シスターコンビかぁ。とほわーっとなん顔を浮かべる天空颯希と上条当麻。しかし、神は二人に試練を与える。

『今すぐに空港に向かって下さい。超音速の飛行機が用意されているハズなので』

颯希と上条の二人には今の神裂の言葉が地獄へのツアーガイドのように聞こえた。

「超音速！？　っつーことはまたあんなバケモンに乗らなきゃいけないのか！？」

「嫌だあーっ！！　あれだけは嫌だーっ！！」

以前イギリスを訪れた際、彼らは友人である土御門元春の策略により、その超音速ジェット機に乗せられたことがある。機内食は後ろへ吹き飛び、少し気を抜くと胃の中のものぐちまけられて顔にかかってしまう状況にまで追い込まれた。あんな思いをまたする羽目になるというのか……。

『いいから早くしてください。さもないと』

「誰が自分から地獄への一本道を全力ダッシュするかボケー！！　こちの辛さを知らないで！！」

「上条さんはもうあんなバケモンに乗る気はないのことよ！！」

『 貴方がたを七天七刀の錆にしなければならぬ  
りますので』

持てる力を全部出しきって空港までダッシュして飛行機に乗った。

4

「「ぎぼぢ悪い……」」

地獄の超音速飛行を体験した天空颯希と上条当麻はイギリスのとある空港のソファの上でダウンしていた。彼らを見た人たちがサササーッと距離を置いている。それぐらい今の彼らは恐怖の対象だった。

するとその時、

「お、お出迎えに上がりました!!」

という女性の声が聞こえてきた。彼らは重い頭を声が出た方へ向ける。

そこにいたのは、

「五和か……?」

「五和だな……」



天草式十字凄教の五和だった。彼女はロンドンにいるはずなのだ。まあ、おそらく神裂とかが呼び出したんだろーなー、ん？とゆーことは天草式十字凄教が勢揃いってこと！？ッてゆーかここロンドンじゃん！！と一人頭を抱える颯希。

そんな彼を見て小動物のように首を傾げた五和は、

「では、行きましょう」

「行きましようってどこに……？」

頭に？を浮かべる颯希と上条に五和は可愛らしく微笑みかけて言い放った。

「イギリス清教の女子寮にですよ」

第4話 10月29日へかいせんまえ（後書き）

土御門「ついにオレの出番だにやー！

決戦を前にして女子寮に連れてこられた上やんと天やん。  
天やんたちはシリアスムードとはかけ離れた女子寮の空気に必死に耐えることに。

しかしそれでも女子寮の女魔術師たちのアプローチは留まるところを知らなくて……！？

次回！！【女子寮<sup>エテン</sup>】

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まるにやー！つて羨ましすぎるぜよ二人ともーっ！！」

## 第5話 女子寮へエデン（前書き）

神裂「どうも。神裂火織です」

五和「……………」

神裂「どうしたのですか五和？ せっかく前書きに出番を貰えたというのに」

五和「女教皇様はズルいです……………いつもいつも私の一歩前を行って……………」

神裂「い…五和？ 一体何を言ってる」

五和「うわぁ ……ん！！！！ 女教皇様なんて嫌いだぁ

！！！！」

神裂「ええっ！？ ちょっと！！ 五和ぁ

！！！！」

## 第5話 女子寮へエデン

1

「着きました。ここがイギリス清教の女子寮です」

五和が運転する四人乗りの車に揺られること十分ほど。天空颯希と上条当麻はロンドンにあるイギリス清教の女子寮に辿りついた。

「意外とデケエな……」

「まあ、シスターの人数が結構多いので」

「シスター、か……」

シスター。

そう呼ばれる人たちに男はいない。そんな常識中の常識を頭に思い浮かべる颯希と上条。何故そんなことを思うのか。それは彼らがこの後に自分たちを待っているであろう恐怖に震え上がっているからだ。

イギリス清教という強大な組織の女子寮に、よりにもよって学園都市側の男性である自分たち二人が入館する。いろんな意味で絶望だ。

腕一本程度で済めばいいけどなーと思いつながら颯希と上条は五和の案内で女子寮の中に入る。

「へー、結構広いな」

「結構人数がいますので……って上条さん！？ 無闇に右手で壁を触らないでください！！ ここには色々な術式がかけられているんですよ！？」

顔を真つ青にしながら上条に注意を促す五和。びつくう！と驚いた上条が壁に付きそうだった右手を勢いよく引っ込める。

上条当麻の右手には【幻想殺し】という特殊なチカラが備わっている。そんな彼が右手で術式がかかった壁に触れるとどうなるかは一目瞭然だろう。女子寮全体の術式が解けて取り返しのつかない事態を巻き起こしてしまうのだ。

弁償とかしなくて良かったよホント。とほつと胸を撫で下ろす颯希。能力者である彼にとって魔術サイドのモノを弁償することは不可能なのだ。

するとその時、

「ん？ おお！ 颯希だ颯希！ ひっさしぶりねー！」

「あ？ ああ。シエリーか。久しぶりだ

」

二か月ほど前に学園都市に単身不法侵入してゴーレムでハッスルした女性、シエリー。クロムウエルが颯希を見つけた途端に挨拶をしてきた。

挨拶をしてきたところまではよかった。問題は今の彼女の格好だ。正直言つて直視できねえ、と颯希は顔を真つ赤に染めて視線をシエリーから逸らす。

露出が多いネグリジエ姿のシエリー。神裂レベルとまではいかないが確かに存在を主張する二つのカタマリが見えるか見えないかの辺りに存在している。そしてテンションが上がっているシエリーの動きに合わせて右に左に動くソレを見て颯希は地面に視線を向けた。

「ん？ どうしたのよ颯希。こっちを見ろってー」

「し、ししししシエリー!? そ、その恰好は何なんだ!」  
「恰好? 別にどこもおかしくねーと思うけど」  
「ろ、ろろろ露出が多いだろオが!」

口調が思わず一方通行っぽくなってしまつぐらい颯希は動揺していた。

そんな颯希を見てニヤアと猫のような笑みを浮かべたシエリーはぎゅーっと颯希の腕に勢いよく抱き着いた。

( 神様ありがとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおおおおおおおおおおおおおおお!! )

2

61

ガタツ!

「ど、どうしたの結標」

学園都市にあるレストランで食事をとっていた結標と麦野。そして突然その場に立ち上がった結標にビクウ!と露骨な反応を見せた麦野はおそろおそろ結標に尋ねる。

すると結標は、ビキリと額に青筋を浮かべて、

「颯希が他の女にデレデレしてる気配がするわ!」

「それではここでお待ちください」

「お、おう……」

「おー」

大食堂の一角に颯希と上条を残して五和とシェリーは大食堂の外に出た。そこには女子寮に住んでいるシスター全員と神崎率いる天草式十字凄教の女子メンバーである浦上と対馬が集まっていた。

今日、女子寮に天空颯希と上条当麻が来る。

そう伝えられた彼女たちは全身全霊をかけて自分のポイントアップを目指そうと神に誓ったのだ。

どん底にいた彼女たちを救った颯希と上条。そんな彼らに彼女たちは純粹な好意を向けている。

そして今日は願ってもないチャンスの日。どっかの凶悪なカボチヤ頭が攻めてくる二日前だろうが何だろうが今日だけは全力で自分のポイントアップに全力を注ぐ！と意気込むのみなのだ。

すると、ゴーレム使いのシェリー、クロムウエルが頬を赤く染めて、

「真っ先にお色気ポイントゲット」

「ひ、卑怯ですよ貴女！ 抜け駆けは厳禁です！」

「え？ でもシスター・ルチアは色沙汰なんて行為は聖職者には要

らないって言っていたような……」

「何か言いましたか、シスター・アンジェレネ？」

「ひい！ べ、別に何も言っていないですよ、シスター・ルチア！」

猫のような瞳をギツラギラに輝かせてシスター・アンジェレネを睨みつけるシスター・ルチア。そんな彼女にひい！と脅えてしまったシスター・アンジェレネは傍に立っていた神裂火織の後ろに隠れた。

普段見ることが無い嫉妬に怒る女のオーラを放つシスター・ルチアが怖いのだ。尻叩きだけは勘弁してー！と心の中でシスター・アンジェレネは懇願する。

「まあまあ、二人とも争いはいけないでございますよー」

金髪系巨乳シスターであるオルソラⅡアクイナスが普段通りのほんわかとした空気を放ちながらシェリーとルチアを宥めた。彼女はこの女子寮のまとめ役の様なもの。それゆえにオルソラⅡアクイナスにはだれも逆らわないし逆らえない。逆らったが最期、食事を胃袋に収めることができなくなってしまうのだ。

しかし、そんなオルソラⅡアクイナスが自ら爆弾を投下する。

「颯希さんはみんなの物でございますからー」

ビキリ、とその場の空気が凍りついたのを神裂火織は確かに感じた。背中をたらたらと嫌な汗が流れ落ちている。それは神裂火織があまり感じない恐怖のせいだった。では神裂は一体何に恐怖しているのか。それはシェリーⅡクロムウェル、シスター・ルチア、オルソラⅡアクイナスの【颯希争奪メンバー】の三つ巴が放つオーラだ。



【聖人】である神裂を恐怖させるほどのオーラを放つこの三人は  
とてもとてもどうでもいいことで睨み合っている。

するとそこに、神裂にとつては願ってもいない訪問者であり、オ  
ルソラたち三人にとつては今から奪い合つてやんよ！と狙っている  
対象である天空颯希が大食堂の扉をギギーッと開けてこちらを見て  
きて、

「何やってんのお前ら……」

「……」

「わーい！ 颯希様ですよー！ 抱っこしてください抱っこー！」

「おっと。コラ、危ねえだろうがアンジェレネ。俺がキャッチでき  
なかつたらどうするつもりだったんだ？」

「絶対に受け止めてくれると信じていましたか……ひい！？」

ついでが条件反射で動いてしまったシスター・アンジェレネが颯  
希の腕の中でリスのように縮こまった。アンジェレネを抱えている  
颯希は『寒いのかな？ まあ、今は秋の後半だし冷えるのも無理ね  
ーな』と一人納得しているが真実は180度違っていた。

シスター・アンジェレネは嬉しさのあまりついみんなの方を向い  
てしまったのだ。そこにはさっきまで争いを繰り返していたシエリ  
ー・クロムウエルとシスター・ルチアとオルソラ・アクイナスがい  
る。そんな颯希LOVEの三人がシスター・アンジェレネがとつた  
行動を許すだろうか？ いや、許すはずもない。

ビキリ、とシエリーとルチアとオルソラの額に浮かび上がった青  
筋が確かに音を立てた。

「……どう思うオルソラ？ 私的には小さい子供にとびっきりの罰  
を与えてーんだけど」

血管が浮き出るほど強く両コブシを固く固く握りしめながらシエ

リー＝クロムウェルが言う。

「……私はその意見に心から賛成でございますよー。ルチアさんはどうでございますか？」

どっかの神の右席など睨むだけで殺せそうな眼をしながらオルソラ＝アクイナスが言う。

「……私はシスター・アンジェレネの愚行を見逃すわけにはいかないのでお仕置きには大大大大賛成です」

自分の得物である馬車の車輪を固く握りしめてシスター・ルチアが言う。

彼女たち三人は全員がぐふふふと妖しく笑っている。その姿はとも神に仕える者には見えなかった。

そして、かのじよたち悪魔は動き出す。

「行きましようか、シスター・アンジェレネ」

「大丈夫さ。少しトラウマができるだけだから」

「ちよっとお仕置きするだけでございますからー」

ガシイイ！と悪魔三人の手が確かにアンジェレネの修道服を掴んだ。それも食い込むほど強く。

そんな彼女たちを目の前にしてあわわわわーっ！！と涙目になるアンジェレネ。彼女はブルブル震えながら自分の修道服を掴んでいる三つの手を見つめて、

「う、嘘ですよね？」

「『そんなわけねえだろおが！！！！』」

「きゃ、きゃあー！！ 助けてください颯希さアアアあああああああああああー！！！」

パタン

アンジェレネを抱えたシエリーとルチアとオルソラが奥の部屋の扉の向こうに消えた。その場に取り残された者の間に何とも言えぬ空気が漂う。

その隣では、

「か、上条当麻！ お腹もへったでしょうし、私が食事を作って差上げましょう！な、何が食べたいですかっ？」

「そうだなー、やっぱり和食かなー」

「和食！？ 私の得意分野ですね！ いいでしょう！！ 日本にすぐに戻りたくなるぐらいの和食を作って差し上げます！！」

「お？ ありがとな神裂」

「はいっ！／＼／＼」

上条に料理を作る権利を得ることに成功した神裂とそれを見て悔しがる五和の姿があった。

天空颯希は一度溜め息を吐いて、

「不幸だ……」

と、傍にいる親友の口癖を吐いていた。

とあるレストランにて。

暗部である【アイテム】の構成員でありドリンクバー系の浜面はピクツとハンバーグを食べるのをやめた。

そんな彼を不思議に思った浜面の恋人でありアイテムの構成員の大能力者の滝壺理后は半開きの眼を浜面の方へ向けて、

「どうしたの、はまづら？」

「今、颯希の野郎が幸せに浸っている感じがした」

浜面の回答に滝壺は無表情で首を傾げて再び視線を天井に向ける。その向かいでは浜面達と同じく正規構成員である大能力者の絹旗最愛がB級映画のパンフレットをばーっと見つめながら、

「相変わらず超颯希さん思いですね。浜面は」

「だろ？ 俺はアイツが最近モテまくってるっていうこの幻想をぶち壊してやりたいって思ってるんだ」

「それ、上条のセリフじゃなかった？」

絹旗の隣でコンビニで買ってきた鮭弁を食べている【アイテム】のリーダーである学園都市の第四位、【マルチタワー原子崩し】の麦野沈利が浜面にゆるいツッコミを入れる。

そんな麦野のツッコミに浜面は無駄に熱く切り返す。

「そんなこと関係ねーんだよ！ 誰のセリフであれ、今の俺の心の中を確実に表す言葉はこれしかない！！」

「あ、そう」

麦野は冷たい目で浜面を見た後、再び意識を鮭弁に向けた。彼女は鮭弁が大好きなのだ。

自分のことなど気にしていない様子のアイテムのメンバーを一瞥して、浜面は一人思う。

（颯希の野郎、どっかでハーレム状態にでもなってねえだろうな？  
そうだったとしたら今度会ったときに俺の怒りを百倍増しでぶつけてやる！！）

浜面の願いは届くのかっ！！  
次回へ続く！

## 第5話 女子寮へエデン（後書き）

神裂「ゼー…ゼー…ま、全く。五和は一体どうしたというんですか……。

え？ 今回は私が次回予告ですか？ 分かりました。天草式十字凄教の女教皇の力を見せてあげます！！

ついに始まった天空颯希争奪バトル！！料理と憎悪と嫉妬渦巻く女子寮で、天空颯希は果たして生き残ることができるのか！！

次回！！【仁義なき戦い】バトルロワイアル！！

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まります！！」

第6話 仁義なき戦いへバトルロワイアル (前書き)

颯希「もう帰りたい……」

上条「元気出せって……」

## 第6話 仁義なき戦いへバトルロワイアル

1

「上条さん、どうぞ。おしほりです」

「上条当麻、梅干しはいかがですか？」

「あ、ああ……サンキューな」

「颯希、これ食べよ」

「颯希、これも食べてください」

「颯希さん、これも食べてくださいでございます」

「ん？ ありがとう」

何だこの恋愛映画のようなワンシーンは。と周囲に集まっているシスター連中と天草式十字凄教の対馬と浦上は思っていた。

二人の男に必死に自己アピールをするイギリス清教の魔術師五人それも戦闘要員ばかりだ。

色恋沙汰は必要ないと日々言っているシスター・ルチアですらあの始末。もうこれから説得力はねーな、と彼女たちは思った。

するとその時、

「あのー……颯希さんたちに敵の情報とか教えなくていいんですか？」

「……あ」「」「」「」

シスター・アンジェレネの鋭い指摘により、色恋沙汰万歳の魔術師五人が凍りついた。



「あれ？ 繋がらないわね」

とある喫茶店にて。

【グループ】の構成員である【座標移動】<sup>今フポイント</sup>の結標淡希はとある人物に小一時間ほど電話をかけ続けていた。

そのとある人物の名は天空<sup>あまぞうひなつき</sup>颯希。

結標と同じ【グループ】の構成員で、結標の幼馴染である少年の名だ。

彼女は「せっかくの休日なわけだし、颯希に買い物に付き合ってもらうのもいいかもしれないわね」と考えて天空颯希に電話をしたのだが、颯希が一向に電話に出ない。

また何かの厄<sup>トランプル</sup>介事に巻き込まれてるんだろうなーと他人事のように樂觀して、今に至るといいうわけだ。

そんな結標のもとに三人の訪問者が顕れる。

「よう結標。一人で寂しくティータムかにやー？」

「寂しいヤツだな。そんなんだから颯希に振り向いてもらえねエンじゃねエの？」

「一方通行<sup>アクセラレータ</sup>、あんまり言いすぎると、壁に埋められてしまいますよ？」

「……………はあああああ」

同じ【グループ】の構成員である土御門元春、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>、海原光貴の顔を見て深い溜め息を吐く結標。チッ。こんな休日にまで会わ

なくてもいいじゃない、と結標は心の中で舌打ちする。  
すると、結標が座っている向かいの席に土御門達三人が腰を下ろした。

「何の用よ」

「にゃー。つれない女は嫌われやすいんだぜい」

「いいから要件を言っ。私は今、凄く機嫌が悪いのよ」

心底嫌そうな顔を浮かべて顎で出口を指す結標。そのジエスチャ  
ーには『帰れ』という思いが大量に込められていた。  
しかし、結標淡希はこの後の土御門の言葉でこの三人を帰すわけ  
にはいかなくなる。

「それは颯希が電話に出ないことが原因か？」

3

女の戦いを強制終了させた女子寮メンバーは全員が食堂に移動し  
た。天空颯希と上条当麻も彼女たちと同じように食堂の椅子に腰を  
下ろしている。

全員が揃ったことを確認した神裂火織はその場に立ち上がって全  
員に聞こえるぐらい大きな声で話し始めた。

「今回私たちが戦うことになる敵の名は【ジャック・オ・ランタン】  
。敵の実力は未知数ですが強大な敵と思われます」  
「未知数なのに強大な敵？」

上条が首を傾げるのを見て、颯希が上条に分かりやすく説明を始める。

「未知数だからこそ強大なんだ。相手の実力が分からない。それはこちらが対処ができないということを指す。そうだろ神裂？」

「はい。一応、建宮齋字を筆頭の元、敵の調査を行ってもらってはいますが少しも手掛かりを掴みません」

「齋字……」

今頃必死で望遠鏡とか観測カメラとかを除いているであろうツンツン頭の知り合いに向かって颯希は心の中で静かに合掌する。

するとその時、バーンツ！！と大食堂の扉が開かれて、赤毛のロングヘアアの長身の少年が入ってきた。

「神裂！！」

「ステイルではありませんか。というか何故この女子寮に？」

「その話はまた後で聞く！！今はとにかく戦闘準備を整えるんだ！！」

敵襲

そう判断した颯希と上条と神裂は、女子寮の外へ向かって駆け出しました。

「な、何故貴方がそのことを知って……」

自分が不機嫌になっっている原因の少年のことを言われてあからさまに動揺する結標淡希。

そんな彼女を一瞥して土御門は続けた。

「そりゃ知ってるさ。今どこにいるのかも知ってるし、何に巻き込まれているかも知っている。横のコイツらもな」

土御門は自分の隣に座っている一方通行と海原を親指で指す。  
アクセラレータ

土御門元春は魔術サイドと科学サイドを渡り歩く多角スパイだ。だからこそどちらの情報も持っているし、どちらにも強大なバックが付いている。

土御門元春は続ける。

「颯希は今、イギリスにいる」

「イギリス……？」

「颯希はまた、魔術師と戦うのさ。あの自分の体一つで戦うしかノウの無い能力を引っ提げてな」

天空颯希の能力は【天使跳躍】エンジェルジャンパー。名前からは想像しにくいだが、要

するに筋肉を操作する能力だ。自分が触れている筋肉という筋肉を全て操作する能力。そんな彼は自分の筋力を底上げして天使のように宙を舞い、天使の矢のように人を殴り刺す。そんな彼だからこそ【天使跳躍】エンジェルジャンパーなどという名前が付いた。

颯希の能力の欠点を涼しい顔で言い放つ土御門を、結標は冷たい

視線で睨みつける。

そんな彼女を見て、土御門元春はこう言った。

「オレたちは颯希の助太刀に行く。お前は どうする？ 結標淡希」

そんなの決まってる。結標淡希は黙って座席から立ち上がった。

「んじゃ、行くとしますか。バカな仲間を助けるためのバカな戦いに」

「メンドクセエ……」

「そう言いながらもちゃんと助けにはいくんですね」

「うるせエ」

「あんまりうるさいと、地面に埋めるわよ？」

大切な仲間を助けるために彼らは立ち上がる。

そんな彼らの名は【グループ】。

一〇月二十九日、イギリスに学園都市最強の暗部が凱旋する。

5

「おいおいおい。ハロウィンにはまだ二日ほど早えぞ……」

外に出た颯希が空を見上げて呟いた。彼の頬には一筋の汗が流れている。その隣では上条当麻と神裂火織が颯希と同じ方向を見て呆然としていた。

## 空中要塞

それが颯希たちの真上に浮かんでいる。見上げても全体像がつかめないほど巨大な要塞。天空颯希と上条当麻はただ口をポカンと空けて自分たちを見下ろす要塞を見上げていた。

「まさかあんなものを用意してくるとは……」

「いやいやいやいや！！ あんなにデカかったら普通に気づくだろう！！ 何やってんだよ天草式十字凄教！！！」

「そ、そんなこと言われましてもね！！ あの要塞はおそらく、発見を避けるために術式を展開させているハズなんです！！」

「それでも見つけるのがプロの魔術師ってモンだろおが！！！」

「うつせえんだよ、ド素人が！！ 貴方に何が分かるんですか！？ 彼らだって、頑張った！！ 頑張ったんですよ！！ 必死に敵を探して。寝る間も惜しんで空を見上げ続けて。そんな彼らの努力を…… 貴方は踏みにじるといいますか！？」

「いやでも見つけられなかったって言う汚名が消えることは無いけどな」

「うっ」

颯希の辛辣な言葉に大袈裟にのけぞる神裂。今はそんな場合じゃないんだってばーと上条当麻は冷や汗を掻きながら思っていた。

要塞と颯希たち。双方に沈黙が漂う。

数分後、変化が起きたのは空中要塞の方だった。

いや、要塞というのは間違いだろう。なぜなら…… 颯希と上条が凄く見覚えのある超音速ジェット機が要塞に激突したのだから。

「「ええっ!? 何でえ!?!」」

突然の特攻。おそらくオートパイロットなのだろうが、驚くのは驚く。

あんなバケモノジェットでも一応、学園都市の乗り物だ。値段もそこそこする。そんなものが突然、ロンドン上空に浮かぶ空中要塞に特攻をしかけたのだから颯希たちは驚愕する。

するとそこに、颯希たちにとって願ってもいない救援が顕れる。

ひゅんっ

「「「「死ぬかと思った……」」」」

「えっと……グループのみんなは分かるんだけど……なぜに浜面がココに?」

浜面仕上。

かつて、学園都市第四位の麦野沈利を沈めた無能力者の姿がそこにはあった。

6

”颯希を殴りたいなら空港に来い”

突然浜面のケータイに送られてきた一通のメール。差出人は浜面

の天敵である一方通行<sup>アフセラレータ</sup>。寒気が止まらない。でも、颯希は殴りに行きたい。そんな葛藤が浜面の胸を燻る。

秋の終盤の冷たい風が浜面の心をサーッと冷やす。

「はまづら、何てメールが来たの？」

脱力系ダウン少女の滝壺理后が死んだような目で浜面を見上げる。

「颯希を殴りたいなら空港に來いだってさ。絶対になんかに巻き込まれるパターンだよなこれ……」

浜面仕上はなんの特殊な能力も持っていない。そこら辺にいくらでもいる不良。それが浜面仕上だ。

だからこそ彼は絶対勝てないような戦いには参加しないし、勝てないと悟ったら即座に逃げ出す。

”親友が困っている”

このメールはそう言いたいのだろう。と浜面は考える。そうじゃなければわざわざ無能力者の浜面なんか連絡してくるはずがない。しかもメールの差出人はあの学園都市最強の超能力者である一方通行<sup>ラレータ</sup>だ。自分の数倍の力を持っているヤツが増援を頼むほどの厄介<sup>トラ</sup>事<sup>ブル</sup>。絶対に無傷では帰れない。

浜面がじつとメールの文を見つめっていると、滝壺がギョツと浜面の腕を掴んできた。

「はまづら。行きたいなら言ってもいいんだよ？」



「……………」  
「はまづらは優しい人だから……あまぞらを助けに行きたいんでしょ？」

浜面仕上は答えない。

「私は……はまづらがあまぞらを助けに行かないはずがないと思う……………」  
「……………」  
「だって……それが私の大好きなはまづらだから」

滝壺の屈託のない笑顔の前に、浜面仕上はハッと気づく。自分のやるべきことに。自分の役目に。

「……………滝壺、俺、ちょっと急用ができた」  
「……………うん。じゃあ私はいつものようにむぎのたちとファミレスで待ってる」

浜面仕上は駆け出した。  
死ぬかもしれない戦場を目指して。

「やっぱり帰ってもいいかなあ？」

空港に付いた途端に意識を刈り取られて気づけばジェット機の中。それもなんかやけに鋭利で速そうだ。

浜面は思う。絶対にヤバイ、と。このジェット機から降りないといけないと本能が警報を鳴らしている。

「……ダメ……」

「そういうお前らが顔を真っ青にしているような恐怖を目の前に俺なんか耐えられるわけねえだろうが!!」

「大丈夫だ。素数を数えろ」

「ほら見る!! 一方通行アクセラレータがおかしくなってんじゃねえか!!」

「大丈夫だにやー。きつと神様がなんとかしてくれる」

「結局神頼みかよって

」

超音速。

それはすなわち音よりも速く動くということ。

浜面仕上げ薄れゆく意識の中で、『滝壺……俺、戦場に着く前に死ぬかもしれない』と呟いていた。

## 第6話 仁義なき戦いへバトルロワイアル（後書き）

浜面「んあ？　今回は俺が次回予告か？

ついに始まったロンドンでの戦い！！

颯希率いる学園都市陣営とイギリス清教のドリームチームで  
空中要塞に侵入するが、そこには信じられない光景が広がっていて  
……！？

次回！！ 【空中要塞】せんじょう

科学と魔術が交錯するとき、物語は始まるぜ！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8517y/>

---

とある暗部の天使跳躍《エンジェルジャンパー》

2011年11月27日23時55分発行